

<地球を歩く>

Reims での在外研修——初めての海外生活——

大貝 健二

2018年9月から1年間、私はフランス共和国のランス(Reims)に居を構えている。1年間の在外研修のチャンスを与えられ、せっかくだからと家族全員でReimsにやってきたのである。本稿の執筆依頼を頂いた時、おそらく編集担当者は私が2018年4月からの渡仏だと考えていたに違いない。したがって、「地球を歩く」に関しても、現地での生活や価値観、研究についての内容を期待されていると思われるが、その期待を大きく裏切ることになるかもしれない。それを覚悟の上で、本稿では、1 在外研修への経緯、2. 現在居住しているReimsについて、3. これから1年間やろうとしていること、3つに焦点を当てて少しばかり紹介してみたい。

1. 在外研修とReims

私の所属する北海学園大学では、おおよそ着任10年を目処に、在外研修のチャンスが与えられる。基本的には、3年くらい前から応募し続けるという慣例があるので、私も3年前から応募を開始した。しかし、フランスに行きたいという思いはあったものの、特に受け入れ先があるわけでもなく、「1年前までに決まればよし」という言葉にしたがって、かなり無防備に構えていた。

在外研修に行く、しかもフランスに行くことを伝えた人は、必ず「何でフランス？」と聞き返す。当然と言えば当然である。なぜならば、私には海外研究をしているというイメージが全く無いからだろう。これまで書いてきた論文に関しても、日本国内の地域経済・地域産業に関するものであり、海外と結びつくものはほとんどない。

しかし、2010年からほぼ年に1回のペースで、フランスに調査には行っている、いや連れて行ってもらっている。大阪市立大学の立見先生をリーダーとした研究チームに加えてもらい、フランスの中でも、ベルギーとの国境に近いLilleを拠点に、「社会連帯経済」についてかなり入念な調査を展開している。おそらくこの資本と地域が刊行される時期と前後して、これまでの研究成果が出版されるはず

なので、そちらも参照してもらいたい、私も調査や議論を進める中で、この「社会連帯経済」に強く関心を持つようになったのであり、自分自身の研究テーマと社会連帯経済を引きつけながら調査研究を進めることは出来ないかと考えたのである。

ところで、この社会連帯経済とは一体何か、ということであるが、社会的経済と連帯経済を1つにまとめた概念と捉えてよいだろう。社会的経済は、簡単に言えば協同組合やアソシアション、財団等によって構成される経済である。概念自体は1980年代に創り出されたが、その背景として、大きな経済から小さな経済への新自由主義的政策へ転換するなかで、市場メカニズムに依らない部門を意識したものである。同様に、連帯経済は新自由主義メカニズムのなかで排除されてきた貧困層を中心に、人のつながりを再構築すること、貧困からの脱却することを目的として形成されている経済である。こうした社会連帯経済の規模が、フランスのGDPで10%程度を占めるとも言われている。日本の研究者においても、近年注目されてきてはいるが、主に社会保障や福祉分野からの視点であり、経済学や地理学の観点からはまだまだ乏しい。

さて、話を戻そう。このような理由からフランスで在外研修期間を過ごしたいという思いはあった。しかし、当初の「1年前までに受け入れ先を確保する」ことが思いのほか困難であった。理由は簡単である。海外の、とりわけフランスの研究者との接点が全くなかったからである。受け入れ先確保のリミットが迫る中、大阪市立大学の立見先生から、旭川大学にいた横田宏樹先生を紹介してもらうことになった。横田氏は名古屋大学大学院を経て、フランスに数年間留学していたことがあるレギュラシオニストである。彼を紹介された後、札幌で会う機会があり、経緯を説明したところ、Reimsに仲の良い若手・中堅の研究者が何人かいて、彼らなら研究分野が近いからいいだろうと、その日のうちにコンタクトをとってくれ、即受入OKの連絡をもらうことになった。

2. Reimsについて

(1) Reimsの位置、自然条件等について

私が滞在しているReimsについて紹介しておこう。Reimsは、フランス北部、シャンパーニュ地方の中心都市である。パリから東に約130キロ、TGVで約50分程度である¹⁾。人口は約18万5,000人で

あり、町の規模、雰囲気など個人的な主観が多分に入っただけで言えば、北海道の十勝・帯広とよく似ている。北緯はおよそ49度で、日本国内で同緯度を通過する地域はない。高緯度であるので、夏と冬の日照時間に大きな差がある。おかげで、11月中旬あたりから、「冬季うつ」の症状が現れ始めて難儀した。10年前、北海道で生活するようになってからこの症状は現れていたが、より症状が重いと個人的には思っている。というのも、朝起きる時間は真っ暗、通勤時間によりやく日の出を迎え、帰宅する頃には真っ暗であり、また、2週間くらい曇天ないしは小雨が続く、太陽をみる日が全くないのである。対処法として、ビタミンDを摂取する、朝起床とともに明るいライトの光を浴びる、太陽が出たときは、無理してでも外に出る、ということを行い、なんとか復調しつつある。

(2) Reims の歴史

Reims の歴史は古い。多くのウェブサイトで書かれている内容の紹介そのままになることをご容赦いただきたい。Reims 駅前広場には、マルス門と呼ばれる凱旋門が残っているらしい。「らしい」という表現であるのは、現在広場が大規模改修されていることにより、立ち入りが制限されているため確認できないからである。このマルス門は3～4世紀頃に建てられたとされているほか、フランスの歴代国王が戴冠式を行ってきた地としても特徴ある歴史を有している。

街に残る歴史的建造物として外せないのが、ノートルダム大聖堂やサン＝レミ聖堂、及び旧大修道院、トー宮殿である。これらはいずれも1991年に世界遺産に認定されている。街の中心部にあるノートル



図1 ランスの位置

ダム大聖堂は、13世紀に建てられている(写真1)。ゴシック式の建築様式の傑作としても知られている。面白いといっは不謹慎かもしれないが、大聖堂の完成に約2世紀を要している。その間に大聖堂建設のための重税を庶民に課したことから反乱が生じたり、英仏100年戦争の際には、大聖堂の周りを英軍に包囲されたことにより作業が中断するなど、紆余曲折があったようである。さらに、フランス革命時には動乱の最中で彫像が破壊され、また、第1次世界大戦時にはドイツ軍の空襲や砲撃によって天井が消失するなどの壊滅的な被害を受けている。そして、1930年代後半から始まった修復作業は、現在も続いている²⁾。



写真1 カテドラルの前面

次いで、サン＝レミ聖堂は1000年前後に建設されている(写真2)。クロヴィスの洗礼を行った聖レミ由来している。同聖堂の建築様式はバシリカ様式というように、フランス人の同僚などは、この建築様式が素晴らしいとのことだが、このあたりの知識が全くない私にしてみれば、何がどう素晴らしいの



写真2 サン＝レミ聖堂

かが説明出来ないのが恥ずかしい。隣には、サン＝レミ博物館があるが、この建物は18世紀にベネディクト修道院として使用されていたものらしい。中には古代ガリア期からの遺跡、出土品などが展示されている。通常であれば入場料として5ユーロかかるが、9月第3週の土日は「ヨーロッパ文化遺産の日」であり、フランス国内博物館などが無料開放しており、家族で訪問してきたのである。

また、歴史的遺産には関係ないが、家から徒歩20分程度場所に、フジタ礼拝堂がある。日本では未だにまともに評価されていないが、フランスでは絶大な評価を今も得ている藤田嗣治(FOUJITA レオナルド)が設計し、安眠している礼拝堂である(写真3)。シャンパンメゾンのG.M. マムの敷地内にひっそりと佇んでいるが、春から夏にかけて、ここを訪れる観光客も多いらしい。



写真3 フジタ礼拝堂

(3) シャンパーニュ地方の主要産業

続いて、ランスを中心とするシャンパーニュ地方の主要産業についてであるが、わざわざ回りくどい言い方をしなくても良いだろう。シャンパーニュ地方という名のように、シャンパンの産地である。このシャンパーニュ地方で製造されたスパークリングワインのみがシャンパンと明記することができる。Reims 市内や南部の Epernay には、テタンジェ、ヴーヴ・クリコ、ポメリー、モエ・シャンドンといった世界的にも有名な大手シャンパンメゾンが立地している。

なぜシャンパーニュの生産が行われるようになったのか、ということについては諸説あるようだが、石灰岩質の土地ではミネラルが豊富なブドウが生産されること、ワイン生産では北限でありながら、街の地下にはローマ人が掘った洞穴が多く存在し、温

度や湿度が一定に保たれることから安定的に発酵がすすむなどの地理的、歴史的要因がある。

また、シャンパーニュの原料となる葡萄の生産に関しては、モンターニュ・ド・ランス、ヴァレ・ド・ラ・マルヌ、コート・デ・ブラン、コート・デ・バルといった地域で生産されている。これらの地域の中には300を超すコミューンが存在し、葡萄栽培面積は3万3,000ヘクタールを上回るという。大手メゾンは自社栽培を含め、各地域で生産された葡萄をブレンドしながらシャンパーニュの生産を行っているが、これがおそらく典型的だろう。

しかし、シャンパーニュの生産に関して興味深いのは、協同組合のほか、レコルタン・マニピュランという個人醸造家の存在である。特に、レコルタン・マニピュランに注目すると、その数は実に5,000を超えるというから驚きである。品質の安定性に関しては大手には及ばないが、美味い不味いを抜きにして、個性的なシャンパーニュを手がける生産者が多く存在していることは間違いない³⁾。

さらに、シャンパーニュに関するいくつかの文献に目を通してみると、①大手メゾンの影響力が強い地域、②葡萄生産者による協同組合が強い地域、③レコルタン・マニピュランが個性を発揮している地域といった形で分類ができそうである。グラン・クリュなのか、プルミエ・クリュなのか、といった畑の格付けでシャンパーニュを見ることに加えて、上記のような地域的な違い、作り手のスタンスからシャンパーニュを眺めてみても面白いかもしれないと考えている。

3. Reims での生活について

日本の地を離れて生活をしたことがなかったのに、色々と困ることが多いかと思ったが、Reims の人たちの気質はおおらかで、人懐っこい印象である。そのため、困ったときは遠慮なく助けてもらうようにしている。その他、実際に生活して気づいたことを羅列的に挙げてみたい。

①病院等について

基本的には、個人開業医をかかりつけ医として指定し、まずはそこにかかる。なので、かかりつけ医は内科にとどまらず、網羅的に診察することになる⁴⁾。私たちがかかっている医者は、1人親方で予約処理から診察、会計まですべて1人で行っている。どうも

これが基本的な開業医のようだ。

フランスは、鍼灸に関して、非常に厳格である。医者でなければ鍼灸を扱えないのである。これで私が困っているのは、鍼灸院を探すことである。日本にいたときは、比較的家の近所で実費診療を行う鍼灸院に月2～3回のペースで通っていたが、フランスには日本のような鍼灸院がない。しかも鍼灸師の数が少なく、アポが簡単には取れない⁵⁾。このなかで自分に合う医者を探すのが難しい。おかげで自身の体質改善と向き合うきっかけになっている。

② CAF（家族手当）について

現在申請中なのは、社会保障だけでなく、CAF⁶⁾という家族手当も申請している。各所で「なぜ申請しないんだ？」と言われていたのだが、長期滞在する外国人に対しても家族手当が支給されるということは、まったく知らなかったからである。扶養者の所得状況と子どもの人数と年齢に応じて、月々口座に入金されるようである。先日、CAFサイトで自分の所得をユーロ換算して入力したところ、日本では考えられない手当の額が表示されたが、あまり期待しないで審査結果を待つことにしている。

③ 公共交通について

街中に住んでいるので、車がなくても公共交通（バス・トラム）を使うことで大体の用事は済ますことができる。市内には10数本のバスとトラム（2本）が走っているが、それぞれの終着ポイントには郊外型大型店がある。大学の講義で大型店の批判を繰り広げながら実際には大型店を使用していることに矛盾を感じるが、これはこれで資料収集である。

公共交通の運転手には女性が多い。また男女を問わず、バスの運転には個性が出やすい。穏やかにブレーキを踏む運転手もいるが、急ブレーキを繰り返すドライバーも多い。ちゃんとつかまっていない乗客が悪いことになるらしい。そのほか、バスにはラジオが備え付けられており、運転手によっては大音量でラジオを流し、車内アナウンスが全く聞こえないこともよくある。しかし、乗客は基本的に高齢者や子どもにやさしい。席を譲るのが当たり前である。おじさんは話し好きの人が多く。私も1人でバスに乗ると、隣に座ったおじさんから話しかけられることがよくある。

④ 子どもの幼稚園、小学校について

現地の公立小学校に子ども3人を通わせている。入学手続きに関して少々手間取ったものの、9月終わりから通学している。保護者の送り迎えが必須である。なので、子どもを送り届けてから自分の研究室に通うことがルーティンになっている。また、昼食に関しても給食組と自宅組がいて、自宅で昼食を取る場合はその際の送迎もする必要がある。

フランスの公教育で面白いと思っているのが、①バカンスが多いこと、②先生の負担が日本と比べてはるかに少ないこと、③日本でいうところの国語と算数はあっても、理科、社会、体育などは科目として置かれていないこと、などである。バカンスが多いことに関しては、時間の使い方に頭を悩ませてしまうが、フランスではバカンスに合わせて親も数日休暇をとって旅行に出かけるということを行っているようである。また、先生の負担が少ないということに関しては、家で行うべき塾と幼稚園や学校で行うべきことが明確に線引きされているからであると思われる。わけの分からない保護者の要求を受け入れるということはないし、そういう要求を保護者もしていない。だから、とつなげば文章がおかしいが、余計な負担がないので、子どもの下校時間に、先生も帰宅する光景をよく見かける。

話は変わるが、現地の公立学校や幼稚園に子どもを通わせることには、少なからず躊躇はあった。現地の子どもたちと馴染めるのかという心配がほぼすべてだったが、通い始めて2ヶ月が過ぎた子どもたちの顔を見れば、何の心配も要らなかった。最初は頑なに登校を拒んでいた（と言っても入学手続きが完了するまで）長男が、今では率先して通っている。フランス語を発することが難しくても、先生や友達が何を言っているのかは理解出来ているようである。この時点で、妻のフランス語レベルを上回っており、最近では寝言でフランス語が出始めている。

4. 自分自身の研究について

最後に、自分自身の研究状況について簡単に触れておきたい。9月から12月までの3ヶ月は、日本で終えることができなかった原稿執筆などに追われて、自分のやりたいことを満足にできたかといえばそれはNOである。フラストレーションが溜まることもあるが、そういうものだと開き直りながら、同僚に事情を説明しつつ自分が動ける範囲で毎日を過

ごしている。

11月下旬には、私が所属するラボ REGARDS での研究報告をする機会があった。6月にスイスで開催されたRSAで報告した自然災害と地域経済に関して、その内容を修正したものを報告した。40分報告の後の1時間の質疑応答が非常にタフだったが、自身の研究内容に関心を示してくれたメンバーもいた。この質疑応答時にフロアから出た質問に関しては、基本的には岡田先生はじめ諸先生方から研究報告の度に頂戴するコメントと非常に近い。そして、私自身がゼミ学生に対してコメントするときの内容ともシンクロしている。地域間比較の視点と、時間軸での変化を見る視点の重要性、そして様々なステークホルダーがいる地域において、どうすれば有効な連携を持つことができるのか、といった内容である。ここでできたつながりを今後どう活かすか、ということが私自身では非常にヘタクソなのだが、良い方向に持って行きたいと考えている。

非常に良いことばかりを書いているような気もするが、明らかに自分自身の力不足を痛感することのほうが、実際には多い。自分自身の語学力の拙さから、痒いところに手が届かない思いを毎日繰り返している。また、フランス語のレッスンは日本でも行っていたが、圧倒的に単語力がなく、フランス語特有のリエゾンなどが入った際には、相手が何を言っているのか全く分からなくなる。また、私としてはフランス語を通じて少しでもやりとりしたいと思っていて、それを相手に伝えたとしても、会話が途中から英語に切り替わってしまうことを、ありがたいと捉えた方がいいのか、頑として譲らない方がいいのか、悩むところである。とはいえ、日々の研究生生活は、同僚や院生から多くのサポートを受けて、なんとかやっている。

また、どこまでこの滞在期間で進むかは甚だ疑問であるが、公私ともにサポートしてくれている同僚と共同研究をしようという話は出てきている。彼の専門領域はBio Economieであるが、日本でいうと

ころの、環境問題、持続可能な発展、地域資源、産業のイノベーション、エネルギー問題、といったところがキーワードらしい。個々のキーワードは親しみがあるが、バイオエコノミーという言葉には、あまり馴染みがない。今現在、彼自身が進めてきた研究を読み進めているところだが、後で、組む相手を間違えたと言われないように、自分自身の立ち位置を明確にしながら何か形にして行ければと考えている。

【注】

- 1) 2006年にLGV東ヨーロッパ鉄道として開通している。パリ東駅からストラスブールまで。
- 2) 大聖堂後陣のステンドグラスは、シャガールの手によるものであり、1974年に配置されている。
- 3) ちなみに、市内のスーパーやワインショップでは、大体15～30ユーロで手に入る。ワインショップに行くと、店の兄ちゃんがすごく美味そうにシャンパーニュの説明をしてくれて、その熱意に負けて購入するも、なかなかシャンパーニュの微妙な味の違いに気づけないのである。
- 4) 長期滞在3ヶ月が経過してからは、フランスの社会保障制度への加入でき、Carte Vitaleという保険証が手に入る。これがあると、自己負担3割で医者にかかることが可能である。当初は1年の期間限定なので社会保障までは必要ないと考えていたが、子どもたちの予防接種のほか、民間の渡航保険ではカバーできない負担が大きかったので、現在申請中である。
- 5) 先日治療に行ったが、早く取れたと言われても1週間後であり、2週間以上待つこともざらにあるらしい。
- 6) La Caisse d'Allocations Familialesというのが正式名称である。住宅手当や家族手当など、低所得者向けの支援機関である。

(北海学園大学)